運動指導の視点に注目した体育授業に関する考察
―器械運動において「できない子ども」への指導―

立石　皓平　（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）
指導教員　柴田　俊和

キーワード：器械運動　運動の捉え方　指導の視点

１．緒言

学校体育における児童、生徒の悩みに対する指導は必要不可欠である。体育授業においても教師は様々な方法で子どもの運動に関わり、子どもの悩みを解決しようとしている。現在の体育では、すべての子どもにある決まった動き方だけを提示し、集団をひとまとめに扱うことが多い。このような授業は、教師の目標像によって「できる」「できない」が分けられる。そして、目標像に達しない子どもは劣等感をもち、能力など自己の責任とされることで､運動に対しての嫌悪感を抱くのである。前述した教師の運動への関わり方で子どもが今以上に運動へ意欲をもち、運動をより楽しむことができるのか疑問に感じた。教師は運動に対して、意欲をもちつつも悩んでいる子どもに応えるために運動の捉え方や指導の視点の転換を図ることが必要だと考える。

そこで､本研究では､運動場面における｢できない子ども｣に焦点をあて「できる」｢できない」の意味を捉え直すとともに、運動指導の視点を提示することを目的とする。

２．研究方法

わざの習得プロセスや、運動・教師・子どもの関係性について述べている生田（1987）の論を基に、運動を「自然科学的運動の捉え方」と「人文科学的運動の捉え方」の二つの立場について比較整理する。

前転の指導を行い、指導後にはインタビューを実施する。

本研究の中心課題である、運動の見方や教師の関わりについて再検討する。

３．結果および考察

１）運動・教師・子どもの関係性

運動を｢自然科学的運動の捉え方｣｢人文科学的運動の捉え方｣の二つの立場から、運動・教師・子どもの関係性について整理した。さらに、実際の運動場面でどのように「模倣」から「なぞり」に入っていくのかを、前転の指導から解釈した。

２）前転の運動形成過程

「模倣」から「なぞり」の一方通行ではなく、一度「なぞり」に入っていても再び「模倣」に戻るというような往還が見られた。さらに「なぞり」段階においては、師匠の内側の感じと外側の「形」の両面から師匠の行っている運動を探ろうとするということが浮かび上がった。

４．まとめ

運動の「できる」｢できない」とは、動きの「形」とともに、行為の意味・情況を運動者がからだ全体で理解しているかどうかが大切である。また、運動指導においては、以下の2 点が「できない子ども」の運動指導に関わる重要な視点として浮き彫りになった。

① 子どもが「模倣」「なぞり」のどの位置にいるのかを把握し、今ここで行われている子どもの運動の意味・目的をつかむこと。

② 運動の変化が何によってもたらされたのか見極め、どのように運動に関わったのかを振り返ること。

今後の課題として、周りの友だちなど情況が複雑になる中で、子どもの運動と関わることが必要である一般的な体育の授業場面において「できない子ども」を生み出さないために、どのような指導が大切であるのか更なる研究が必要である。

引用・参考文献

生田久美子(1987)「わざ」から知る　東京大学出版会